

まえがき

十年間続いた信州大学環境問題研究教育懇談会が、従来の命題である“信州の環境保全と地域計画”から、“ハイテク時代における信州の環境保全とその創造”と題名を変更して、さらに三年間の研究・教育活動が順調に継続されてきた。今年度は既に11月24日に、全学的規模での環境科学の研究会が、松本の旭会館と長野の工学部を結ぶネットワークで、一昨年、昨年と同様に開催された。ただし、事務局が環境生理学教室から衛生学教室に移行して、この会も新機軸で運営が行われている。次年度からは、繊維学部の桜井教授の所の管轄として運営が行われることも、内定した。昨年、何回も訪れた台風の経路のように、責任体制の中心が南信、中信、東信と移っている。この事は全学的組織の発展のためには望ましいことであったとも言えよう。

産業革命は人類に幾多の幸福をもたらしてはいるが、一方、環境の公害問題を引き起こしている。ハイテクを利用した半導体工場での電子部品の洗浄に使われるテトラクロロエチレン、トリクロロエチレンなどは、地下水の汚染を招き、飲料用井戸水の中に現れて、その飲用者に対する健康障害の恐れがあることを、指摘され始めている。また、地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、交通渋滞など、問題は尽きることがない。しかし、環境問題には結局、人類の生活様式のアメニティと心身の健康がその目標として設定される。新しい時代には新しい環境が必要となり、個々の人間は自分の廻りに適応し易い環境を創造しながら、全体の環境にも順応して行く英知を開発することを迫られる。

この研究会ではそのような、方向への基礎的ならびに応用的な資料を本誌に提供するものである。

1991年1月19日

世話人 上田五雨